

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 26 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720026

研究課題名（和文） 神秘主義をめぐるプラトニズムの宗教思想史とその方法論

 研究課題名（英文） A History of Religious Thought and Methodology of Platonism
: From a Viewpoint of Mysticism

研究代表者

土井 裕人 (DOI HIROTO)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：80568402

研究成果の概要（和文）：

本研究は、新プラトン主義の宗教思想について、特に紀元 5 世紀のプロクロスを取り上げ、後世との比較を念頭に置きながら神秘主義を主な論点に研究を行った。その結果、プラトンにおける「神に似ること」というテーマが、「魂の乗り物」といった展開を見せつつ具体化されていることが明らかとなった。併せて、この研究に必要な方法論として、情報学の成果も導入し、宗教研究の新たな方法論の模索を行った。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research is to explore the religious thought of Neoplatonism. In order to that, we concentrate on Proclus and the theme of mysticism taking into account the influence on posterity. From this research, these points are clarified: Proclus took over the argument “becoming like God” in Plato and extended it with “the vehicle of the soul” from Plato’s text. Additionally, we adopt a new methodology from informatics, e.g. XML, visualization, etc.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、宗教学

キーワード：宗教史、新プラトン主義

1. 研究開始当初の背景

プラトンについては主に西洋古代哲学による多くの研究があり、キリスト教神秘主義についても研究の蓄積がなされている。しかし、プラトンに端を発する新プラトン主義からキリスト教という現代にも連続した宗教

的影響となると少数の研究にとどまるなど手薄であり、とりわけ宗教学の見地においては解明が進んでいない状況であった。

本研究は、宗教学の立場から、プラトン思想という基盤の上に後世の影響史へと研究を展開すべく、この研究テーマを着想したも

のであった。これに際しては、思想や宗教の研究に新たな視角をもたらすべく、他分野の学問による成果を援用する必要があると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、新プラトン主義も含めたプラトニズムが有する宗教的次元と、プラトニズムからキリスト教への宗教的影響という、国内外ともに研究が未発展なテーマの解明を目的とした。特に、プラトニズムおよびそれに関連した宗教思想について、神秘主義という観点から彼らの著作に基づいて比較考察することを目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、文献の読解を中心とした方法に加え、現代の情報学で確立され多くの分野に展開しつつある手法も援用した。これは後述する通りであり、宗教思想の比較に新たな方法論を提示することができたと思われる。

4. 研究成果

(1)新プラトン主義の宗教思想に関する研究成果

紀元5世紀の新プラトン主義者であり古代哲学の終焉期に活躍したプロクロスについて、彼の『ティマイオス註解』および『神学綱要』を主なテキストとして、プラトンの宗教思想において重要な神秘主義的テーマであった「神に似ること」—宇宙の魂の円環動を模倣することで人間の魂を混乱から本然のあり方に回復させること—を中心に研究を行った。以下、①人間のいわば本体たる靈魂—語としてはプシューケーと pneuma の位置づけ、②魂と身体との媒介者となり魂を乗せて上位の世界とこの世界とを上下する魂の乗り物、これら論点を踏まえた上での③プロクロスにおける「神に似ること」について要約して述べることにしたい。

①ギリシアにおける靈魂は例えばホメロスの叙事詩に遡ることができるが、そこでのプシューケーはある意味で死後存続しているものの、後世考えられたような純粋な非身体的存在とは言い難いものであった。ソクラテス以前の哲学者においては、アナクシメネスらによって自然の全体としての万有すなわち宇宙を生かす魂としてのプシューケーが主張され、個人の魂としてのプシューケーもやがて明確化されていった。その一方、pneuma の場合は他の用語との違いが判然としないため、ソクラテス以前の古代ギリシア思想において用語を基軸としながら pneuma を追いかけることは困難と思われる。しかし、多くはない用例においてしばしば他の語と類義的に使われながらも、宇宙と人間をつ

なが生命原理かつ知的原理という文脈において pneuma を見出せることは確認できる。また、プラトンにおいてプシューケーは「魂」として「神に似ること」についても極めて重要な位置を占める一方、それに比して pneuma の用例は相当に少ないだけでなく、プシューケーのような重要概念とも言い難い。しかし、プラトンでは影の薄かった pneuma も、後世の解釈では魂と身体の間において大きな役割を担うことになる。その典型例となるのが、プロクロスの『ティマイオス註解』において言及された、pneuma (氣息) 的乗り物である。

②プラトン『ティマイオス』においては、宇宙の制作者 (デーミウールゴス) が子の神々に人間の可死的部分の制作を命じたうえで、自らが人間の神的魂を手がけ、「それぞれの魂をそれぞれの星に割り当て、ちょうど馬車 (オケーマ) にでも乗せるようにして乗せると、この万有の本来の相を示して、かれらに運命として定められた掟を告げた」と語られる。この箇所について、プロクロスは、乗り物には不死なるものと、身体の死を生き延びるが不滅ではなく非理知的魂と結びついたものを考え、前者は制作者の手がけた星の乗り物、後者は4元素から成り個別的魂の降下に際して子の神々が前者に織り込んだ気息的乗り物とする。魂の乗り物について『神学綱要』では、類似しない不連続なものは相互に影響を及ぼすことができないため、上位者は何らかの類似した中間者によって下位の物体ないし身体まで結ばれる必要があるとされ、存在身分が異なる魂と身体との間にあつて両者の性質をともに備え魂を直接的に分有する「第一義的な物体」が媒介者として登場する。これは、世界を越えた原因者すなわち制作者に手がけられこの世界に魂が上昇・下降するサイクルにあつても実体を保って分割されない魂の乗り物と位置づけられる。ここで注目されるのは、魂の模倣において乗り物の動、とりわけ円環動が論じられ、階層的世界の間の降下や上昇とともに提示されていることである。

③こうした模倣は個々の乗り物が個々の魂を模倣するだけにとどまるものではない。『ティマイオス註解』では、降下に際しても上昇に際しても、個々の魂が神たる宇宙の側を模倣すると語られており、プラトン『ティマイオス』において主張されていた「神に似ること」との関連も見いだされよう。じっさい、プロクロスもプラトン『ティマイオス』の「観察する側のものを観察される側のものに似せて」という箇所を引用しながら、常に幸福な宇宙万有に似ること、人間自身もその原因の側へと導き上げられ幸福な者になると主張する。このように、『ティマイオス註解』における「神に似ること」は、存在の

階層だけでなく動においても媒介者となる乗り物という、新プラトン主義的な論点を伴って再解釈されていると考えられた。プロクロスにおいて特徴的なのは、气息の乗り物を含めた後天的な付与物の除去により魂の上昇が達せられるとされ、その過程において密儀や神働術が愛智・哲学に勝る寄与をなし、また類似（似ること）を経ることで真の祈りの頂点としての合一という神秘主義的境地へ人間が向かうとされていることである。こうした実践重視の傾向は新プラトン主義においてはイアンブリコスが転回点となったとされ、プロクロスによっても引き継がれたものであった。すなわち、プロクロスにおける pneuma は、宇宙における魂と身体—あるいは非身体と身体—というテーマをめぐって論じられているだけでなく、ギリシア哲学の伝統が明確な儀礼的实践と合流する地点にあって、哲学と宗教がいわば交錯した、あるいは不可分に一つとなったあり方を見せるものであった。これは、哲学的文脈を持った pneuma が、プラトニズムに神秘主義的実践を伴った宗教思想としての特徴を与えていることを示すものであろう。プロクロスにおける「神に似ること」に、哲学的解釈の深化と密儀宗教的要素の具体化の両側面が見いだされる様相は、哲学が迷信的な宗教に堕していく落日の過程であるのか、哲学と宗教が融合したある種の思想が創造されゆく過程であるのか、おそらく評価が分かれるところであろう。しかし、後世への宗教思想としての影響を踏まえれば、後者の解釈であってよいと考えられる。ただ、こうした論点については、今後の研究に向けた課題となるであろう。

(2) 宗教思想の研究に関する新たな方法論に関する研究成果

コンピュータやネットワークが急速に発展を見せる昨今、人文学においても人文情報学 (Digital Humanities) として情報学の成果の取り入れが図られるようになってきている。本研究では、宗教思想の研究に新たな方法論がどのように応用できるかを検討に加えた。

まず、本研究の対象は文献が主であるため、それに適した手法の検討が必要となった。そのため、伝統的な文献研究の電子化を目的に、ハンブルク大学のマイスター教授らのチームにより開発された CATMA (Computer Aided Textual Markup and Analysis) というソフトウェアを用いることとした。このソフトウェアは、開発チームでは確認していなかったものの、Unicode 形式の古典ギリシア語テキストをそのまま読み込んだ上で、XML Extensible Markup Language) によりマークアップをするなど、主要機能を問題なく使

用できることが実際のテストによってわかった。

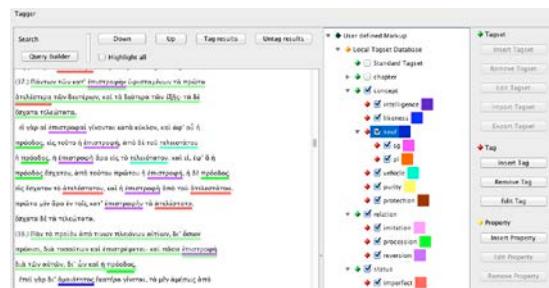


図 1

また、ワードリストを自動作成した上で、下図 2 に示すような分布分析を行い、テキストにおける特定の概念の分布状況を明らかにして思想の解釈に資することができることもわかっている。こうした過程において CATMA が有用なのは、ギリシア語の多様な変化形をグループとして扱うことが可能な点である。

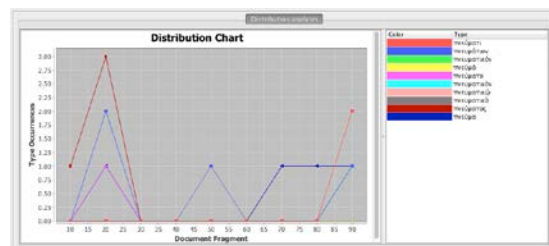


図 2

さらに、プロクロスの宗教思想において重要な概念間の関連の度合いを CATMA で算出したうえで、それらを視覚化 (ビジュアライゼーション) して思想の内容を文字とは別の形で明らかにすることを試みた。そこで、『神学綱要』なども参考に加え、関連する語も追加して『ティマイオス註解』の宗教思想を D3.js (Data-Driven Documents) という JavaScript ライブラリが提供する force-directed graph (力指向グラフ) によって視覚化したのが以下の図 3 である。この図においては、ノードから他のノードにどの程度の連関により結びついているかが、行き先と線の太さによって表されている。しかし、この例では視覚化そのものは行うことができても、『ティマイオス註解』からピックアップした用語が雑多に配置され用語間の連関がいささか捉えにくいという難点も見られた。

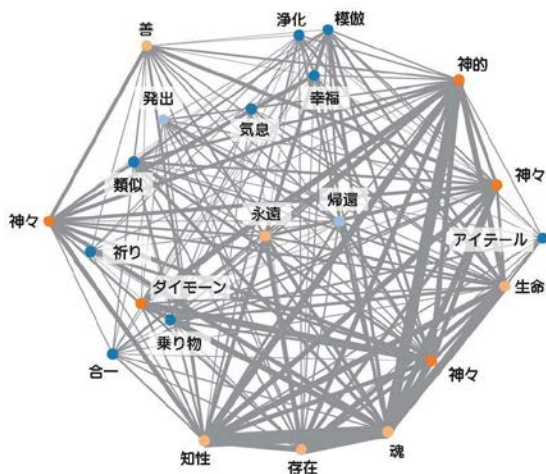


図 3

そこで、もう 1 つの手法として、同じく D3.js によって co-occurrence matrix (共起マトリクス) での視覚化を試行したのが下図 4 であるが、思想の内容を捉えるという点では効果的とは言いがたい結果となった。この場合に問題であったのは、クラスターの枠を越えて諸概念が相互に関連していることである。これは、図中で黒く塗りつぶされている箇所が該当し、概念間の特徴的な関係を見にくくしてしまっていると言える。これは、小説といったテキストを扱う場合と思想を扱う場合との事情の違いを反映していると思われる。

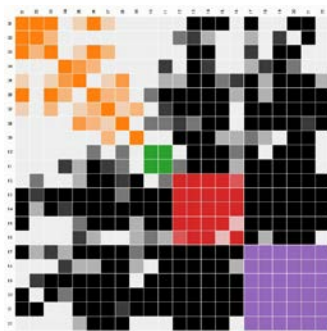


図 4

このように、宗教思想研究への情報学の応用という点では、今後よりいっそうの検討や改良を必要とする問題も残されている。グラフィカルな操作を特徴とする CATMA においては、ワードリストからギリシア語の変化形を一括りにすることは容易であっても、クエリによる分析に少なからず手間を要した。また、D3.js による可視化については、『ティマイオス註解』における諸概念の連関そのものが今回のグラフにあまり適していないという事情もあり、思想研究において有用なものとするにはまだまだ洗練が必要と考えられる。

とは言え、このようなメリットとデメリットは、実際にテキストを分析し可視化する過程を経て初めて明らかになっており、試行錯誤はやむを得ないところがある。文献を基盤とした思想研究に対する新しい手法の応用には、今後なお探究が求められると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- ① 土井裕人, 思想研究へのマークアップと視覚化の応用—プロクロス『ティマイオス註解』の分析と視覚化—, 査読なし, 『筑波大学宗教学・比較思想学論集』第 13 号, 2013, pp. 1-14.
- ② 土井裕人, テキストのマークアップによる思想研究の試み—CATMA によるプロクロス『神学綱要』の分析—, 査読なし, 『筑波大学宗教学・比較思想学論集』第 12 号, 2012, pp. 1-16.

〔学会発表〕(計 5 件)

- ① 土井裕人, プロクロスにおける「神に似ること」の問題, 日本宗教学会第 71 回学術大会, 於皇學館大学, 2012 年 9 月 8 日.
- ② 土井裕人, 宗教思想としての新プラトン主義をめぐり—考察, 筑波大学哲学・思想学会第 32 回学術大会, 於筑波大学, 2011 年 10 月 29 日.
- ③ 土井裕人, プロクロスにおけるオケーマをめぐって, 日本宗教学会第 70 回学術大会, 於関西学院大学, 2011 年 9 月 3 日.
- ④ 土井裕人, プロクロス『ティマイオス註解』における靈魂の問題, 日本宗教学会第 69 回学術大会, 於東洋大学, 2010 年 9 月 5 日.
- ⑤ Hiroto Doi, Narrating Myth as Philosophical Thought, XXth World Congress of the International Association for the History of Religions, University of Toronto (カナダ), 2010 年 8 月 20 日.

〔図書〕(計 4 件)

- ① 土井裕人, 松村一男・平藤喜久子・山田仁史(編)『神の文化史事典』(分担「ゼウス」ほか 33 項目), 白水社, 2013.
- ② 土井裕人, 鶴岡賀雄・深澤英隆(編)『スピリチュアリティの宗教史』下巻(分担「西洋古代の宗教思想と「スピリチュアリティ」の問題」), リトン, 2012, pp. 53-71.
- ③ 土井裕人, 川村邦光・市川裕・大塚和夫・奥山直司・山中弘(編), 山折哲雄(監修)

- 『宗教の事典』(分担「天使」・「光と闇」),
朝倉書店, 2012, pp. 876-877, 883-885.
- ④ 土井裕人, 星野英紀・池上良正・氣多雅
子・島蘭進・鶴岡賀雄(編)『宗教学事典』
(分担「霊・魂・精神」), 丸善, 2010,
pp. 336-339.

[その他]

ホームページ等

(直接参照するための URL が長いため、該
当号に対するレポジトリの URL を挙げた)

[http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylimediao/
search/issue.do?target=local&issueid=1138
935&lang=ja&charset=utf8](http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylimediao/search/issue.do?target=local&issueid=1138935&lang=ja&charset=utf8)

[http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylimediao/
search/issue.do?target=local&issueid=1110
227&lang=ja&charset=utf8](http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylimediao/search/issue.do?target=local&issueid=1110227&lang=ja&charset=utf8)

6. 研究組織

(1)研究代表者

土井 裕人 (DOI HIROTO)
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：80568402